

# 土地の印象更新挑む

## 文人の 武蔵野

大岡昇平は、「武蔵野夫人」(1950年)を通じて、国木田独歩の「武蔵野」(1898年)によって定着した明治以来の武蔵野のイメージを更新しようとした。

銚子で生まれて山口などで育った独歩は、作品の力で「武蔵野」の人となりますが、武蔵野生まれの文人ではありませんでした。独歩は、渋谷に半年ほど暮らしてはっきり武蔵野を意識して「今の武蔵野」

### 大岡昇平 ⑮



小金井市には「武蔵野夫人」に登場する「はげ」と呼ばれる地形の坂道がある

(「武蔵野」を発売した当時の題)を書きます。

当時の渋谷を含めた武蔵野の地誌に詳しいわけではなかったと思われませんが、近世以来桜の名所だった小金井堤をとりあげ、あえて桜の季節ではなく夏の景色を描いてその価値を示しました。それにより、「武蔵野」という一つの文学的風景を定着させまし

た。「武蔵野」の面影が残る〇〇のような広告的表現は、独歩の「武蔵野」から派生して生まれたと言えます。

散策と黙想を誘う独歩の表現は、武蔵野を散歩する者を詩人にしました。ですが、独歩の描いた風景が武蔵野に暮らす人々の内面を表象していたわけではありませんでした。

武蔵野に生まれ武蔵野に暮らす人間の立場から武蔵野を描いたのが大岡の「武蔵野夫人」です。「武蔵野夫人」は、武蔵野という土地で武蔵野の

自然とともに生きる人間の心理を描きました。そこで描かれた自然は、自然主義文学にみられるような内面としての風景に還元される対象ではなく、日本の伝統文化にみられるような超越的な存在でもなく、人間の営みの拡大により地質学レベルでの影響を受けた地球環境です。

1909年に新宿で生まれて渋谷近辺で育った大岡は、独歩が仮住まいをしてから十数年経った頃の渋谷で過ごしています。渋谷を観察し、「武蔵野の面影を残した古き良き渋谷」と同時に地方から上京してきた貧しい人々が住む「場末」としての渋谷をみていました。しかし、「武蔵野夫人」の舞台は渋谷ではありませんでした。大岡もまた独歩を追いかけるように小金井を舞台に選んでいます。

小金井を選んだ理由には、過去に本欄で紹介した並木仙太郎が明確に示したように、小金井が明治から昭和初期にかけてもともと武蔵野らしい場所として認識されていたことが背景にあると推測できますが、大岡が独歩を意識してあえてトレースしたようにも見えます。

「武蔵野夫人」が独歩の「武蔵野」の武蔵野イメージを一扫することはできませんでしたが、新たな武蔵野イメージを形成することとなったとは言えそうです。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。

